

答え合わせ・解説

問1	答え 1 パンパ	アルゼンチン中央部に広がる温帯草原はパンパと呼ばれます。この地域は平坦で肥沃な土壌に恵まれており、広大な土地を活かした肉牛の放牧や、トモロコシなどの飼料作物の栽培が盛んに行われています。サヘルはアフリカのサハラ砂漠南縁に位置する半乾燥地帯を指します。
問2	答え 1 冷涼な高地という環境を活かし、じゃがいもの原産地として多様な品種を主食にしている。	アンデス山脈周辺の国々では、高地の厳しい自然環境に対応するため、その土地が原産であるじゃがいもを中心とした食文化が築られました。地域によって異なる高度や気候に合わせて、数千種類にも及ぶじゃがいもが使い分けられており、アンデス地方の農業と生活を支える基盤となっています。
問3	答え 1 1月や2月頃に最も気温が高くなり、月間降水量が300ミリメートル近くに達する雨季となる。	南半球にあるオーストラリアでは、太陽の南中高度が最も高くなる12月から2月頃にかけてが夏季となります。タウンズビルの気候統計によれば、この夏季にあたる1月や2月に降水量が集中しており、季節風（モンスーン）などの影響で雨季となっていることがわかります。逆に、7月や8月は気温が相対的に下がり、降水量が減少する冬季（乾季）にあたります。
問4	答え 1 かつての白人優先主義を反省し、現在は多様な民族の文化や権利を尊重する多文化主義の政策がとられている。	オーストラリアでは1970年代まで、白人以外の移民を制限する「白豪主義」が維持されてきました。しかし、国際的な批判や社会の変化を受けてこの政策は廃止され、先住民であるアボリジニやアジア系移民など、異なる文化的背景を持つ人々が共生する「多文化主義」の社会を目指すようになりました。現在ではアボリジニの聖地であるウルル（エアーズロック）の管理権が返還されるなど、権利回復の動きも進んでいます。
問5	答え 1 地理的に近いアジア諸国との経済的な結びつきを重視し、労働力の確保や市場の拡大を図るために、従来の白人優先の政策を改めた。	オーストラリアは、かつてはイギリスなどのヨーロッパ諸国と密接な関係にありましたが、地理的な近接性からアジア諸国が重要な貿易相手国となりました。経済発展に必要な労働力を確保し、アジア市場での競争力を高めるため、人種を問わず移民を受け入れる多文化社会へと舵を切りました。その結果、現在はアジア系住民が社会の重要な一翼を担っています。
問6	答え 1 かつては日本の主要なエネルギー源であり、現在はオーストラリアが最大の輸入相手国となっている。	石炭は高度経済成長期以前の日本を支えた主要なエネルギー源でしたが、現在は国内生産がほぼ行われておらず、輸入に依存しています。オーストラリアは日本にとって石炭および鉄鉱石の最大の輸入先であり、広大な露天掘り炭鉱から効率よく採掘された資源が日本へ運ばれています。他の選択肢にあるチリは銅、ギニアなどはボーキサイト（アルミニウムの原料）の記述であり、石炭の特徴とは異なります。
問7	答え 1 放牧	アンデス山脈の高地では、標高が高くなるにつれて気温が下がるため、それぞれの高度に適した土地利用がなされています。森林限界を超えた標高4000m以上の地域は農作物の栽培には適さないほど寒冷ですが、寒さに強いリャマやアルパカといった家畜を育てるための草場が広がっているため、移動しながら家畜を飼育する形態が発達しました。
問8	答え 1 大航海時代以降、長期間にわたってスペインによる植民地支配を受けたため	15世紀末の大航海時代以降、南アメリカの広範な地域はスペインの植民地となりました。支配国となったスペインの言語や宗教（カトリック）、文化が現地に持ち込まれ、定着した結果、独立後も多くの国々でスペイン語が公用語として引き継がれています。